

明末に於る喀爾喀と泰寧

鴛 淵

一

一

明末清初に及んで蒙古族が明清二國の間に介在して微妙な對立關係を結んで居た事は疑ない事實であつた。積弱の明朝はこの蒙古族を併せて清朝に對抗せんとし、清朝は又明に向ふ前に蒙古を克服して己の右翼として明を包圍せんとするの態勢を取らうとした。此に明清二國の和戰兩様の微妙な駈引接觸が行はれたのは當然の事である。然し當時小王子察哈爾部には成吉思汗の裔孫・達延汗の嫡系たる陵丹汗があり、その祖業を復せんとして虎視眈々たるあり、清には一世の怪傑太祖奴兒哈赤父子が出て、渺たる蘇子河畔の微酋の地位を脱して滿洲の王者となり更に發展を期して居り、明は積弱の狀態とはいへ天子臣僚皆滿蒙の地を掌にして祖功に應へんとして居つた。初め明朝は天下の宗主として滿蒙二民族にのぞみ、蒙古可汗は歴史的誇を以て滿洲族に對して居たが、清太祖父子の活躍は次第にその狀態を變ぜしめた。是に於て明朝は蒙古に働きかけて強引に攻守同盟を結んで清朝に當らんとしたので、蒙古の陵丹汗や喀爾喀諸酋が多額の歲幣を食つて明朝と結んだのは自らなる成行であつた。之に反して清朝は初め蒙古に服して居た

が、次第に強勢となるやその羈絆を脱せんとし、遂に武力を以て反抗して次々に經略の手を伸し、先づ最も近接して居た科爾沁部や喀爾喀部を傘下に收めて他に及び、以て山海關道を攻略し得ぬ間の明朝包圍態勢を作り上げたのである。右形勢の變化は實にめまぐるしいばかりで些かの油斷も隙も許されぬ所であつた。かくなつて來れば同一蒙古族内に於ても、その明に對し又清に對する態度に於て差等を生ずるのは免れぬ所であつて、或ものは明朝に付き或ものは新興の滿洲に通じ、又中には首鼠兩端を持つものがあつた。元來蒙古族は小王子部の東遷後、興安嶺の東西に於て可成りの變動を來したのである。乃ち種々の事情により餘儀なく東遷したとはいへ、苟くも大元可汗の末裔が動いたのであるからそれが爾餘の諸部に大きな影響變動を與へずしてすむわけはなかつた。殊に兀良哈三衛に對して、又その北に南に住する同族諸部に大きな影響を與へ、その結果これ等のものが或は衰亡し或は他と離合するに至つた。それに加へて圖們汗(土蠻哈)の發展は一時蒙古族の大同團結を作りながらも、其の歿後は反動を來して分裂を生じ、やがて前述陵丹汗の嗣立するに及んで壓力權威を失ひ部族の離散を招いた。之に對して陵丹汗は益々強權を以てのぞみ、諸部は益々離脱せんとしたので、之に乗じて清朝は術策を弄して離間誘引を講じた。その蒙古同族内の抗爭が激化する事はいよ／＼清朝の對蒙經略の成功と明の綏撫策の失敗とを意味するのであつて、かくして明末清初の蒙古族の實際的地位は次第に弱體化されつゝ、この三者對立の微妙な關係は益々複雜化されて行つたのである。

二

右の如き三者の對立關係の中、蒙古の内部に關する事情は蒙古族自身の記録として僅に蒙古源流があるのみで、然もその具體的な詳細なる事情が不明である時、明や清の記録が甚だ區々として容易に真相を理會し得しめぬ點があるのも亦當然の事と思ふ。記事に混同があり従つて事實の把握に混雜を來すことは免れ難い事である。特にそれは明側の記録に於て明に多大の關係あつた喀爾喀方面に於て甚だしいやうに思はれる。元來喀爾喀には内外の二部があり、内喀爾喀五部は初め五鄂托克が存して因つて成つて居た事は確かな事と思はれるが、既に鄭曉の吾學編北虜考等に見える如く、喀爾喀部を寫して罕哈部三營と云つて居る以上、少くとも嘉靖年間には早くも五部より三部に減じたものゝ如く、それは初め達延汗の分封の際は五部五鄂托克あつたものが、時と共に内部的に變動あつて、名義上は尙五部といひながら實は三部となつたと解すべきであることは、夙に和田博士が指適された所であり、その三部とは札嚕特・巴林・把岳志の三であることも亦述べられた所である。(内蒙古諸部落の起原第一編三六二—三六四頁)

さてこの札嚕特・巴林・把岳志の三部が喀爾喀蒙古として存した事、及び明末に及んで清朝と亦密接な關係あつた事は、清朝の記録に於て明らかな所である。清朝實錄始め諸書に、これらの部が遼瀋開鐵の西邊に在る重要な蒙古部落として記されて居るに反し、明末明側の記録には殆んどこの名稱を以て記す所なく、又記すにしても誤解を以て充されて居るのは甚だ怪しむべきことである。この三部は清朝興起の時案外にも早く關係を生じ、爾來種々の交渉あつた部族であるから、當然明側にもその事情が知られ其の名が記録されるべきであると思はれるにかゝはらず、それが見えぬといふのは何か別の文字名稱を以て寫されるとか、或は他に混同して記されるやうな事情があるのでないかと

考へざるを得ない。その點に就ても既に和田博士が述べられた(前掲書三一—三二〇頁) 如くであつて、明らかにこれら喀爾喀の諸部は或は泰寧と記され或は福餘と記されて居るのであり、彼等は明人からしては兀良哈三衛の衛名を以て呼ばれたことが知られるのである。喀爾喀と兀良哈とは固より系統は明らかに異なるにかゝらず、前者が後者の名を以て記されるに至つたのは、この喀爾喀諸部の據地が何時の間に兀良哈三衛の地に混入し、その部衆がこの地に移住したる結果、明人はこの間の區別を明確になし得ずして記録するに至つたによる事と解せられるのである。元來兀良哈三衛は明初には、洮兒河上流に朶顔、洮南地方に泰寧、齊々哈爾方面に福餘が置かれたが、宣徳より正統にかけて南下して遼西北方シラムレン河畔に據り、又その東西に擴がつた。乃ち朶顔は今日の承德・凌源の方面に、泰寧は朝陽・阜新の方面に、福餘は彰武・康平の方面に夫々割據するに至つた(史學雜誌四〇ノ六、和田博士)。之に對して喀爾喀諸部は初め其の北方の喀爾喀河畔に在り、後に宣徳・正統の頃兀良哈の南下に關聯して同じく南下し又東方に發展して兀良哈の北境に移住した如く、次で嘉靖年間小王子の東遷後は東邊の變動に乗じて次第に三衛の地に混入して來たらしい。乃ちその結果明人は東北邊の事に忙しくして十分に其の形勢に注目し、相當多量の記載を残しつつも其の事情の眞實を識る事を得なかつたのであつて、此に甚だ曖昧なる混雜した結果を招いたと言はざるを得ないのである。實際かくして喀爾喀の三部たる札魯特・巴林・把岳志は明清二國と様々なる關係を有しつつ、清朝側の記録には正しくその名稱が記されながら、明朝側の記録にはその名が記されずに、或は福餘とか或は泰寧とか記されて、茲に大なる混雜を來したのである。故に明末清初の喀爾喀の歴史を検するには、右三部の全體の事情に亘つて考慮せねばならぬの

であるが、それは此の小篇の到底なし得ない所であるので、此には特に「泰寧」と記された喀爾喀部酋に就いて、換言すれば喀爾喀と泰寧との關係の一斑に就いて述べ、從來の説を補足しその事情を明らかにしようと思ふ。

三

速把亥の系譜に就いて。

數ある喀爾喀部酋にして泰寧の酋と記されるものの中で、最も目につく強盛な酋首は泰寧の速把亥である。この人は既に和田博士が説かれた（内蒙古諸部落の起原三二五頁以下）やうに喀爾喀巴林部の祖たる蘇巴海達爾漢諾顏を指すと思はれるのであつて、小王子圖們汗の執政理事の一人として著はれた喀爾喀の衛徵索博該に當ることは、先づ疑ない所と見てよいであらう。然る時清朝側の記録である皇朝藩部要略の世表巴林部の條に、

元太祖傳十五世曰達延軍臣汗。十六世曰阿爾楚博羅特。十七世曰和爾朔齊哈薩爾。十八世曰蘇巴海。
と記し、同じく蒙古遊牧記卷三、巴林部の條にも

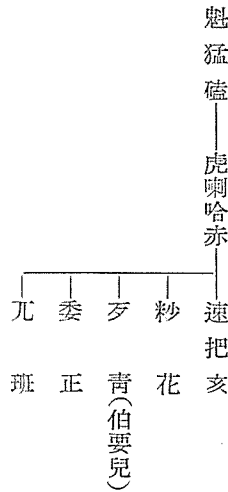
元太祖十六世孫阿爾楚博羅特、生和爾朔齊哈薩爾。子二。次蘇巴海。稱達爾漢諾顏。號所部曰巴林。
と記して居る所の蘇巴海が即ち右の速把亥といふわけであり、更に皇朝藩部要略世表札嚕特的條には、

元太祖裔、與巴林同祖。其○内齊汗父曰忠圖。祖曰巴顏達爾伊勒登。曾祖曰烏巴什。爲蘇巴海兄。

と記し、又蒙古遊牧記卷三、札嚕特的條には、和爾朔齊哈薩爾の長子を烏巴什と呼びその部祖となつたことが見えて

居るから、蘇巴海即ち速把亥には烏巴什といふ兄の有つたことが知られる。果して右の如くんば蘇巴海即ち速把亥は、達延汗——阿爾楚博羅特——和爾朔齊哈薩爾——蘇巴海といふ系譜を有つ事となるのであり、彼が喀爾喀巴林部の長である限りは當然のことと云ふべきである。

然るに次に明側の記録である張鼐の遼夷略を見ると、泰寧衛酋速把亥の系譜を記して、



と云ひ、更に韞九思の萬曆武功錄卷十二、東三邊三の速把亥傳には

速把亥。虎喇哈赤仲子世。嘉靖丙午歲○二十五年一五四六年……是時大父魁猛嗑惑內羅言。常入我刺梨山。……

と記して、前者が虎喇哈赤の長子といふに對し後者は仲子と云つて居るのは異なるが、父祖の排行の點に於ては同様の見解を示して居る。

そこでこの明側記録の記事を先の清朝の記録に比するに、直に比定し得ない點のあることを見出すであらう。無論速把亥を蘇巴海と同一人とする時、その父なる虎喇哈赤と和爾朔齊(哈薩爾)とは幾分似た所あるが、魁猛磕と阿爾楚

博羅特とは字音の上では全く異つて居る。然し若しその何れかが異稱であり又別稱であるとすれば、必らずしも誤りとは言へないのであつて、明清の録者が夫々別個の名を聽いて記したと言へるであらう。けれども茅元儀の武備志卷二〇四、鎮戍一、薊鎮の條所引の職方考を見るに、

又遼東境外。有虜二枝。一名魁猛可。一名虎喇哈赤。專爲難于遼西。

と記して、此には前述の二人に當ると思はれるものを魁猛可・虎喇哈赤と云つて父子とは見ず別人對等のものやうに扱つて居る。同様の記事は張萱の西園閣見錄卷五十三、薊州鎮の條にも見え、此には、許論曰……としてある。許論は明史卷一八六許進附傳によれば、許進の少子で嘉靖五年の進士、後に兵部尙書になつて歿して居るが、「九邊圖論」等を著はして北邊の事に從事した人であるから、その記事は信頼し得る氣がする。尙又方孔炤の全邊略記卷十、遼東略には、嘉靖三十四年四月の條に、

先是。北虜虎喇哈赤及魁猛儘・打來孫等。欲假道東夷內侵。不遂。魁猛傑……

とも見えて、この二者が打來孫即ち達賚遜汗と密接な關係ある事は知られるが、二者の血統上の關係は知るを得ない。然る時果して初に記した如く父子の關係あつたか疑問と思はれる。然るに又單にその名稱字音の上からすれば、蒙古遊牧記卷一、科爾沁の條に、

洪灝間。蒙古臣阿魯台爲瓦剌所破。其酋奎蒙克塔斯哈喇。姓博爾濟吉特。元太祖弟哈布圖哈薩爾十四世孫也。

とある所の科爾沁部の遠祖たる奎蒙克塔斯哈喇の奎蒙克と右の魁猛儘とが相適ひ、同音異字として同一人を指すやう

にも見られる。和田博士は之に就いて、洪熙間といふのは誤りで大凡嘉靖中の人と見るべきであるとされた(前掲書二) (八七頁)が、若し之が従ひ得るものとすれば、魁猛磕は奎蒙克で科爾沁部の祖となり、泰寧とされる巴林なり札魯特なりの人でなくて、従つて虎喇哈赤とは全く血統を異にすることとなり、其の間に父子の關係ありとは言ひ難いのである。之を要するに、

(一)明側の記録たる瞿九思や張鼎の所記を信ずれば

阿爾楚博羅特——和爾朔齊哈薩爾——蘇巴海

魁 猛 磕——虎 喇 哈 赤——速把亥

とみるべく、又然らずして

(二)蒙古遊牧記の科爾沁部の遠祖奎蒙克を魁猛磕とするに従へば

魁猛磕 || 阿爾楚博羅特 であると共に

魁猛磕——虎喇哈赤 の父子關係も認められなくなる。果して何れに従ふべきか今直には決定するを得ないが、萬曆武功録や遼夷略が俱に十分の信を置き得るならば、(一)に従つてよいのでないかとも考へる。

次に明實錄嘉靖四十一年二月の條、兵部尙書楊溥等の言を記したものをみるに、

今西北之虜。宣大薊鎮有俺答・辛愛・把都兒・土蠻。遼東有虎喇哈赤。……

とあり、又嘉靖の進士たる汪道昆の北虜紀略には

東則泰寧・福餘地。直遼左矣。虜之特起新酋。曰虎喇哈赤者。衆不滿千。……

と記して居り、更に萬曆武功錄速把亥傳には冒頭に朶顏の酋花當の附せし事を記して、

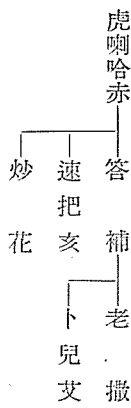
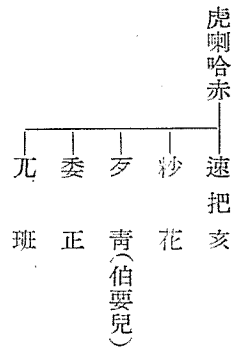
嘉靖丙午歲○二十年……自是之後。花當之屬。皆與虎喇哈赤。並勃々著名塞上矣。延引至速把亥世。並懾懾。……

とあり、是等の記事によれば嘉靖の中葉に於て、遼東の代表的酋長として特起の新酋と稱せられ、然もその衆は千に満たなかつたが、やがて邊塞上に勃々と名を著はしたと傳へられるのは、この虎喇哈赤その人である。故に若し清朝側の所傳に言ふ所の和爾朔齊哈薩爾と虎喇哈赤とが同一人であるとすれば、阿爾楚博羅特が新に内五部鄂托克喀爾喀の統を得てから僅に一代、その衆を統べたのであるから、衆千に満たさずとはいへ次第に興隆の風ありしものとして、明人の所傳は正しく眞を傳へたものと言つてよからうか。この點よりして魁猛隘を阿爾楚博羅特に擬定し得るか否かは尙疑問であるが、虎喇哈赤を和爾朔齊哈薩爾に當てる時、速把亥が蘇巴海たることは正に有り得べきことと言つて差支ない。

四

速把亥の兄烏巴什に就て。

前項には速把亥の尊屬について述べたが、次に彼の同排行の兄弟は如何であるかに就いて一考しよう。前にも記したやうに、遼夷略の所記によると、



となつて、速把亥は虎喇哈赤の長子として弟四人あつた如くであるに反し、萬曆武功録の速把亥傳には「虎喇哈赤仲子也」と記し、同じく炒花傳には「虎喇哈赤季子也」と云ひ、同じく老撒・卜兒艾傳には「老撒・卜兒艾。皆答補子也。……至己卯。與卜兒艾引兵。從速把亥。速把亥親叔父行也。」として居る。故に萬曆武功録の右の記事だけによれば、

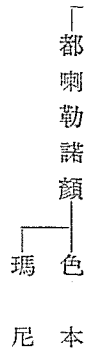
とならねばならないのであり、遼夷略の所傳とは大に異つて來る。萬曆武功録は萬曆壬子（四十年、一六一二）の撰、遼夷略は天啓元年（二一六）の撰にかかり、撰者が俱に北邊に詳しい人であつてみれば俱に信じ得べく、その撰述に九年の差ありとはいへ系譜の如き記述には大差なからべき筈のものである。然るにその記述に於て甚だしい相異なるのは何故なりやと云へば、やはり當時明人が蒙古の事情に關して單に表面的な知識を有するのみで疎漏誤解を避け得なかつたによるものといふべく、従つてかかる明人の記録のみでは到底不十分であるので、更に他の清朝の諸記録によつて比較擬定

して妥當の見解を立てねばならぬのである。よつて此に速把亥の同排行を検するに、順序を以て果して彼が長子なりや否や、然らざる時は別に何人が長子であつたかといふ方面から考へてみたい。

前述の如く遼夷略は速把亥を以て虎喇哈赤の長子であるとし、萬曆武功錄は速把亥を仲子、答補の二子の親叔父行として居るから、答補を以て長子と考へたもののやうに見える。然し此に親叔父行と云つたからとて、答補が直にその兄で長子であつたと考へる必要はなく、従つて答補が長子であるか否かは別として、少くとも速把亥が長子の地位になかつた事は明らかであると思ふ。然るに一方清朝側の所傳によれば、蒙古遊牧記も皇朝藩部要略世表も俱に虎喇哈赤に擬定される和爾朔齊哈薩爾に二子あつて、長子烏巴什を札魯特部長となし、次子の蘇巴海即ち速把亥を巴林部の長として居る。而して清朝はこれ等の蒙古諸部とは開國當初から代々深い關係を持続して互に認識を強めたのであるから、其の所傳は十分信じ得るものと考へる。然る時は明側の所傳は不十分であつて、清側の記録によつて虎喇哈赤 \parallel 和爾朔齊の長子を烏巴什、次子を蘇巴海 \parallel 速把亥と推定して差支なからうと思ふのである。然るに烏巴什の名は明人の記録には見ゆる所なく、兀把賽といふのが或はその同音異字かと思はれるが、或は又別名を以て記されて居るはせぬかも考へられる。故に此には烏巴什に關する卑屬の系譜全體より考察するのが妥當と思はれるのであり、以て本問題の解決に資したいと思ふ。

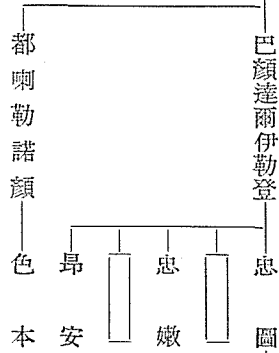
先づ皇朝藩部要略世表、札魯特の條によれば、

(A) 烏巴什——巴顏達爾伊勒登——思 圖——內 齊



とあり、蒙古遊牧記卷三、札嚕特的條には

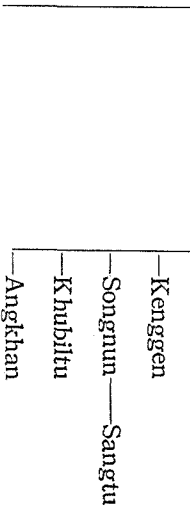
(B) 烏巴什 — 巴顏達爾伊勒登 — 忠 — 圖 — 內 — 齊



額爾濟格(忠嫩從弟)

と記す。又 Howorth, History of the Mongols I, p. 396 “The Dsarads or Dzaraguts” 即ち札嚕特的條には

(C) Ubasi — Bayandar Ilden — Songtu — Natishi



朝に和戦兩様の態度に出て居た事が知られる。

次の Angga 昂阿は老檔卷五十、天命八年四月の條に「Jarut 部の Angga belle の惡を懲さんが爲に阿巴泰等が討伐してその父子を殺せしこと」を記し、之に對應する滿洲實錄卷七の漢文ではこの名を札魯特昂安貝勒と記して居る所の人と同一人と考へられるのであつて、昂阿・昂安共に同音異字にすぎないのである。又次の Jucet Keoken 珠徽特扣肯も右兩人と常に名を連ねて見えるもので、滿文老檔卷十四、天命五年正月の條に「札魯特部の Jucit Keoken の使者來りて曰く……」とも見え、右三人は何等か特殊の關係あつたことを知り得る。然る時 B 表に巴顏達爾伊勒登の第三子・第五子と記される忠嫩と昂安とは右の鍾嫩と昂安(阿)に當り、それは同時に C 表の Bayandar Ilden の三子 songnun 五子 Angkhan である事は容易に考慮されるから、C 表に Songnun の兄と記される Kenggen が右の Jucet Keoken に當るもので何れか一方が訛轉か誤聞と見るべきであるまいか。然る時 C 表の第四子として記される Khubiltu は他に所見なく如何なる人であるか不明であるが、B 表にも五人兄弟らしい事が伺はれるから、巴顏達爾伊勒登 Bayandar Ilden の兒輩は一先 C 表に従つてよいと考へる。

(一) 桑圖

C 表に Songnun (Jongnon 鍾嫩)の子と見える Sangtu 漢字で桑圖と譯されて居ることは、滿洲實錄卷七、天命八年正月の記事として「Jongnon 貝勒の子 Sangtu taiji 子等妻を皆獲たり」とあるに對し、漢文で桑圖台吉と記し、それに註して「乃鍾嫩貝勒之子、昂安孫也」と言つて居ることによつて疑ない。然し前掲の表に比較して昂安の孫と

いふのが誤りであるのは言ふ迄もなく、鍾嫩と昂安は兄弟で従つて昂安は桑圖の叔父と見ねばならないのである。尙桑圖の事は老檔卷十七、天命六年閏三月二十一日の條に、清朝への通交の事見え、又同卷五十三、天命八年五月三十日の條には、太祖が科爾沁の奧巴台吉に與へた書中に「次に Sangtu の父 Jongnon 我が居らしめたる Urgudai hada の村を襲へり……」と見えて居り、鍾嫩の子である事はいよ／＼確かである。

(三)色本・巴喀、

この二人は天命四年七月喀爾喀の強酋介賽と同じく、清太祖の手に俘へられた札嚕特部酋であつて、滿洲實錄卷六には、滿文に於ては Jarut tatan i Bak beile, Bayartu daicing, Sebnun taiji……として一を beile (貝勒)一を taiji (台吉)と區別するが之に對應する漢文では、札嚕特部巴克與巴雅爾圖岱青・色本諸台吉等……として別に區別して居ない。巴雅爾圖岱青は別として、他の二人に就ては滿文老檔の右俘擄の記事では「札嚕特部の兄弟……」として居る。この兄弟といふ事は、滿洲實錄卷六、天命五年三月一日立誓の事の條に「色本立誓曰。吾與巴克弟兄二人……」としその滿文に於ても「Bak, Sebnun meni ahūn deo……」と記し、滿文老檔卷十四の同じ事の條にも、「Sebnun beile の誓ひたる書の言て」 Bak, Sebnun 我等の兄弟……」とあるによつて略々明らかであらう。之に就て先に和田博士は「巴克とは太祖實錄に蘇本の兄とあり、實は其族兄なるが如し」(内蒙古諸部落の)と言ひ、更にその註に實錄が巴克を蘇本の兄としたのは「蒙古に族兄を呼んで兄と稱する習ありしによるべく、……藩部要略によるに色本の同胞には弟瑪尼あれども其兄なし。Haworth 氏が巴克を唯一族とせるは正しき根據に従へるなり。Hist.

Mong. I. p. 396」と解説された。果して何れに従ふべきか、前掲の表にも眞の兄弟と記すものない以上、或は和田博士の説に従ふべきものかと考へる。

(四) 鄂齊爾桑

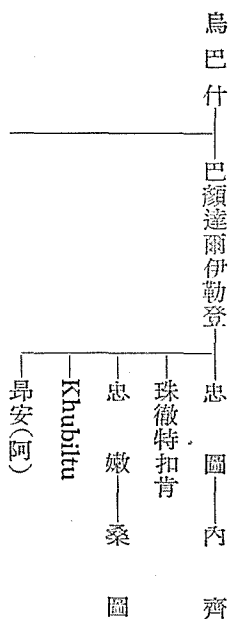
滿洲實錄卷七、天命七年正月の條に「先に戰に於て俘へたる蒙古喀爾喀の札嚕特部 Bak belle の子 Ocirang を質として送り來りしにより、Bak belle を其地に放ち遣せり」と滿文で記して居るに對し、漢文では、「札嚕特送巴格貝勒子鄂齊爾桑。來質。於是遂放巴格遺。」とあり、鄂齊爾桑が質として來りその父巴喀(格)貝勒が遣へされた事が見えて居る。又滿文老檔卷四十三、天命八年正月二十一日の條に、諸貝勒の事を記した註に、「Ocirang は Bak belle の子、父の代りに俘へられて置かれて在りき」とあり、この兩者が父子なる事はいよく疑なく、尙老檔卷四十四、天命八年正月二十五日の條の記事の註には、Dorji, Ocirang が Bak belle の二子なる旨を記して居る。然しこの巴喀貝勒の父が何人であるかは何等の記載なく明らかでないが、族弟色本の父が都喇爾諾顏である限り、何人かその兄弟で同じく烏巴什の兒輩の一人であつたものが、その父となるのであらう。

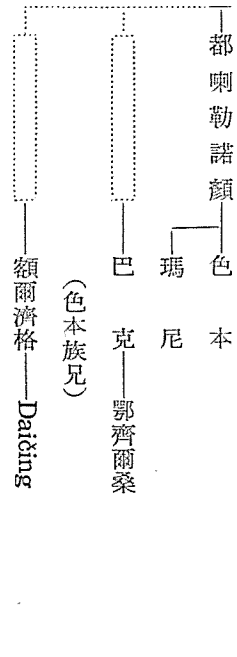
(五) 額爾濟格

滿洲實錄卷四に、萬曆四十二年四月十五日、嚕札特的鍾嫩・內齊汗等が太祖の兒輩に女を送つた事に倣つて、同年十二月、「蒙古國札嚕特部の Ejiige belle の女を太祖崑圖命汗の子德格類台吉に妻として與へんとするに、德格類台吉迎へ行きて禮を盡し大宴會を催して娶れり」といふ記事が見え、對應する漢文では Ejiige belle を額爾濟格貝

勒と記して居る。同じ事を滿文老檔卷三には、「蒙古國札嚕特部の Hara Babai beile の子 Daicing はその妹を汗の子徳格類台吉に妻として送り來りき」と記し Ejiige = Hara Babai 其の子に Daicing のある關係を示して呉れる。この Hara Babai の名は滿文老檔卷十五、天命五年六月十九日の條に Joci Keoken, Neici han 等と共に記されて居て、これ等の人と關係ある事が十分知られる。而して B 表に額爾濟格が忠嫩の從弟と記されて居る所により、この額爾濟格 Ejiige は忠嫩 = 鍾嫩、Jongnon の從弟で相當の地位に在つたものと見て差支ない。又天命四年十一月清朝と會盟した喀爾喀諸貝勒の中に見える Ejiige 額爾濟格は確にこの人であり、又天命四年七月鐵嶺郊外に太祖を攻めた介賽の軍中に見える「札嚕特部の Bak beile, Bayartu daicing, Sebun taiji . . .」の中、Bayartu daicing 巴雅爾圖岱青といふのは前後人名の關係からして、右の Hara Babai の子なる Daicing と見てよいのであらうか。尙この人は太祖の爲に捕へられなかつたから、やがて同年十一月清朝との會盟にも加はつたと見られ、會盟諸王中に Bayartu 巴雅爾圖とあるのもこの人を指すものと見得られると思ふ。

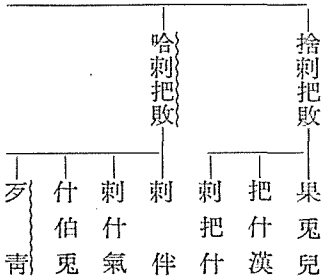
以上清朝の滿文老檔や滿洲實錄によつて札嚕特部の酋首として知り得る所のもの前三表に併せて記せば、



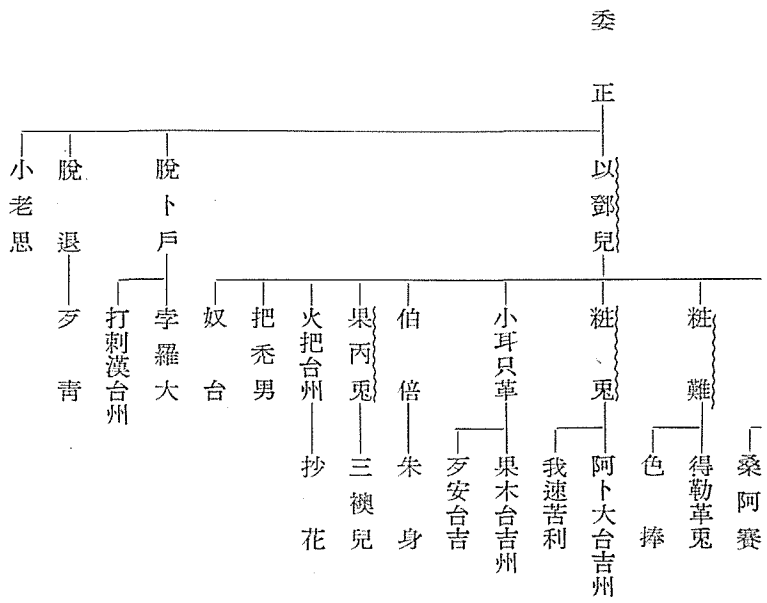


となり、前三表を幾分か補足し得たやうに思はれる。

然るに次にこの世系を遼夷略の記載に照應せしめるに、泰寧酋といふ虎喇哈赤の第四子として居る委正の世系に可成り類似して居るのを知る。即ち今その委正の世系を示すと次の通りである。



右の二表を比較するに、



(一)巴顔達爾伊勒登の伊勒登と以鄧兒(鄧兒倒置)とは同じと見られる。山中問見錄卷十、海西の條に、
暹加奴子曰卜寨。仰加奴子曰那林李羅。收二奴余燼。日夜謀報怨於猛骨李羅及歹商。連西虜以兒鄧[○]。侵掠歹商。數入
威遠堡。……とある以兒鄧は右の以鄧兒を指すものであらう。

(二)忠嫩即ち鍾嫩はこの粧難に擬してよからう。又粧難の子色捧は音の上からすればかの色本に似て居るが、實際の
系譜としては如何であらうか。

(三)前表に Khabitu とあるのは、後者の果丙兎と見られる。滿文老檔卷五十三天命八年五月三十日の條、科爾沁の
與巴台吉や諸貝勒に與へた太祖の諭旨の中に、諸酋の罪を擧げた一條として「Hubitu が使者を殺してその財貨を
奪つた」事を言つて居るが、Hubitu はその前に Jongnon, Sangtu, Bak 等の名が見えて居る所からして、此の
果丙兎 Khabitu に當てゝ差支ないと考へる。

(四) Hara Babai は後表の哈刺把敗にあたる。但し滿文老檔の記事によつて此人を額爾濟格とする時、前表には忠
嫩の從弟とあるに對して此ではその親兄弟となりその點一致しない。故に此點に難點あるが、その從兄弟であるか、
親兄弟であるかは別として二者が近き血縁關係にある事は認め得られるであらう。

(五)従つて後表の哈刺把敗の子歹青とあるのを、前表の額爾濟格の子 Daixing にあてるのはよく合致することであ
り、正しく疑なからう。

(六)後表に粧兎と見えるのが前表の忠圖であらうか。音の上からしては、肯て當らぬ事ないが、但、その兒輩の點長

幼の序からしては尙疑問がある。

以上數多いとは言へぬが、略無難に擬定推定がなされる限り、當然の結果として烏巴什が委正にあたるものと考へられるのである。然もこの關係は、蒙古遊牧記卷三札嚕特部の條に、「烏巴什自稱偉徵諸顏。號所部曰札嚕特。」とある事によつて證し得らるべく、委正(今音 wei-cheng)とは烏巴什の別稱偉徵諸顏の偉徵(wei-cheng)の異譯にすぎないのである。之は蒙古語で、沈曾植の蒙古源流箋證卷六喀爾喀之衛徵索博該の注に「委正卽偉徵音轉。亦作衛徵、蒙古貴人稱號。非人名也」と言ふに従ふべく、當時烏巴什が札嚕特部の部長たる重責に在つたが爲に、かゝる名稱・稱號を得たものと解せられる。然る時委正が烏巴什であつて重要な地位に在つたものとすれば、此人は遼夷略に記す如く虎喇哈赤の四男と見るべきでなく、實は清側の記録に見る如く正しく長子であつた事が知られる。されば此點に於ては虜情を詳に視察して書いたと思はれる張籛の遼夷略も、必らずしも全てが無條件に信用されるとは云へないのであつて、又十分な批判を加へて採否を決定せねばならないのである。而して烏巴什卽ち委正は遼夷略によれば、天啓元年(天命六年)には既に物故し居り、其の子が後を嗣いだと思はれるが、清側の記録による時は忠圖の子である内齊が汗を稱して居る所からして、部酋の實權は此の系統に在つたものとみるべく、恐らくこれが嫡系であつたと考へられ、明側の記録に忠圖を粧鬼に當てたとしても、内齊に當る名が見られないのは怪しむべきであるが、事情不明によつて記されなかつたものであらうか。然る時先に萬曆武功錄による時、虎喇哈赤の長子は答補であり、其子に老撒・ト兒艾の二子あるやうに見える事を述べたが、之は長子と見るべきでない事が明らかになつたと思ふ。遼夷略によれば、

A、滿文老檔卷二十一、天命六年四月七日の條に、「Barin Dureng beile の九十八戸、一百二十の男、五十の馬、四百十の牛、一千の羊を携へて逃げ來れり」と記す。

B、滿文老檔卷二十三、天命六年六月十五日の條に、「蒙古國 Barin 部の Dureng beile の子等 Ayusi taji、Gurbusi taji、Sattar taji の三台吉屬下の蒙古人一百六十戸逃げ來れり」

C、滿文老檔卷六十五、天命十年五月七日の條に、「Barin の Dureng beile の弟 Gurbusi taji 十戸と家畜とを携へて逃げ來れり」とあるものゝ中で Dureng beile は凡て同一人である事疑なく、その子弟關係も稍々知られると思ふ。

(三) Nangnuk taji

A、滿文老檔卷三十、天命六年十二月五日の條に、「Kalka Barin の Nangnuk taji の使者五人馬三匹を携へて來れり」

B、滿文老檔卷三十二、天命七年正月五日の條、「Kalka の Nanungk beile 屬下の一百四十四人、牛二百三十、馬三十、羊一千百六十、駱駝三匹を携へて逃げ來れり」、同六日の條には、「Kalka Nangnuk beile 屬下の十六人徒步にて逃げ來れり」、同九日の條には、同貝勒屬下の三戸十七人が牛四匹を携へて逃げ來れり」とあり、

C、滿文老檔卷三十八、天命七年三月一日の條に、「Kalka 蒙古の Nangnuk, Tariki, Sidar 三貝勒屬下の六十戸子女等牧群家畜を率ゐて逃げ來れり」

D、滿文老檔卷四十六、天命八年二月二十四日の條、「Barin の Nangnuk beile 屬下の二十四人、牛二十六、馬一匹を伴つて逃げ來り、黃泥窪の地に入れり」、卷四十七、同年三月十四日の條には「Barin の Nangnuk 屬下の十人歩みて逃げ來れり」とある。

以上の記事、時には喀爾喀とのみ云ひ、時には喀爾喀巴林、巴林と云つて居るが、何れも同部を指すことは明らかで、Nangnuk beile が喀爾喀蒙古の中の巴林の人であることを示すものである。滿洲實錄卷八、天命十一年三月の條、太祖が喀爾喀五部の諸貝勒の背盟を怒つて討伐した事を記した記事の中に「前鋒四王・二王・阿濟格合吉・碩託合吉先至襲努克寨。襲努克領從者數人。棄寨而走。滿洲諸王隨後追之。襲努克且戰且走。忽背後一王突至。襲努克未及避。被射死於馬下。射之者乃四王也云々」とあり、その襲努克に註して「喀爾喀巴林部落葉赫巴圖魯幼子」と云ひ、滿文では「Kalkai Barin i tatan i Yehe baturu beilei fyanggū jui Nangnuk beilei ga šan de isinafi. . . .」と云つて居る所の襲努克貝勒は必ずしも滿文老檔に記す所の Nangnuk beile と同一人であると思はれる。次第に彼が反情的態度になつた爲に、部衆の逃散して清朝に來歸するものが増加したものであらう。

(四) Gurbusi taiji.

A、滿文老檔卷四十一、天命七年四月十八日の條、「Barin の Gurbusi taiji に屬するもの十六男六女、牛二十四を携へて逃げ來れり」。

B、滿文老檔卷四十六、天命八年二月二十九日の條、「Kalka の Gurbusi beile 屬下の二男一女馬二匹」 Joriktu

beile 屬下の二人歩みて逃げ來れり。」

C、滿文老檔卷四十七、天命八年三月十四日の條、「Gurbusi taiji 屬下の二男二女逃げ來れり」

D、滿文實錄卷七、天命六年十一月十八日の條、「蒙古喀爾喀部内古爾布什台吉・莽果爾台吉。率民六百四十五戶並牲畜來歸……以聰古圖公主妻古爾布什。賜名青卓禮克圖。給滿洲一牛衆三百人。並蒙古一牛衆。共二牛衆。授爲總兵。其莽果爾以宗弟濟伯哩都濟呼女妻之。亦授爲總兵。」とある所の古爾布什台吉(Gurbusi taiji)が老檔の Gurbusi taiji と同一人であることは何等疑なく、莽果爾台吉(Manggo)はこの人と親近の間柄に在つたものであらう。

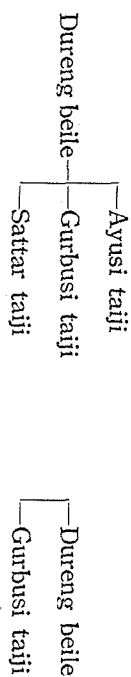
(五) Ubasi taiji.

A、滿文老檔卷三十、天命六年十二月十一日の條、「Barin の Ubasi taiji の使者 Gurbusi の使者と共に來貢せり」とあり。この名は恐らく

B、滿文老檔卷十三、天命四年十一月、清朝との會盟の諸王の中に Ubasi taiji dureng といふ一聯の名が見えて居るのと同入であらうか。滿洲實錄卷六の同じ事の記載には Ubasi dureng 烏巴什都稜とあり、此には taiji とないが、dureng が連つて居る所からして前のも taiji をふくめて一聯のものとしてよいのであらう。而して此には巴林の台吉と記されて居るから前述の札魯特的烏巴什と見るべきではないと考へられる。

以上を通觀するに、第一に Ebugedei beile や Huwang taiji 又は hūng taiji と稱せられた人で喀爾喀巴林の巨

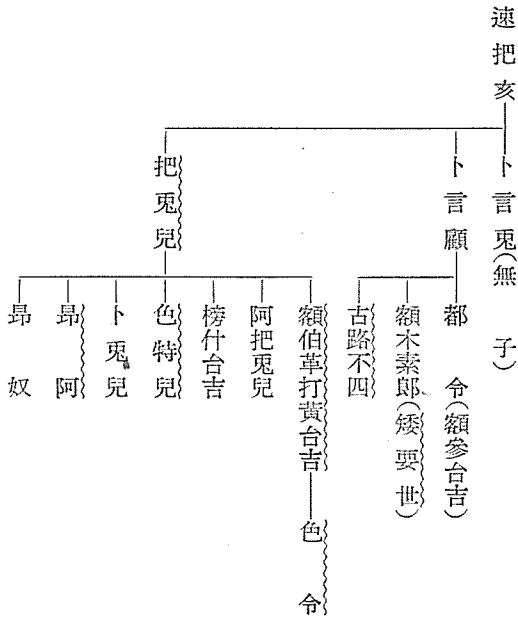
酋であつた事疑なく、従つて之を前表Cの Ebugetei Khun Baghaturo に當る事は當を得た所であらう。故に天命四年十一月の會盟にも加つて居たのである。但し清側所傳の A、B 二表にその名が見えないのは怪しむべき事であるが、記録の不備脱漏によるものであらう。第二に Dureng belle に就ては、



の二系譜を得る事は疑問の餘地あるが、恐らく Gurbusi taiji を弟とするのが誤りでなからうかと考へる。而してこの父子四人が前三表に見えないのも、亦記録の不備と云はねばならない。第三に Nangnuk taiji は前表に於ては系統不明であるが、此によつては巴林の Yelhe baturu の末子である事が分り、又 Tariki, Sidar と密接な關係あることが推知される。第四の Gurbusi taiji は第二の Dureng belle の子であり、清朝によく服した事が知られる。第五の Ubsi taiji は果して如何なる系統か明らかでないが、古爾布什台吉と關係あつたらしい事は前引用の記事によつて知られる。dureng といふ言葉がその稱號であるか、それとも別のものであるか、別とすれば第二の Dureng belle をこの方は意味するかも思ふが明らかでない。

以上滿文老檔や滿洲實錄によつて知り得る所は、多少前掲の表の不備を補ふ點あるけれども、決して十分とは言ふを得ず、又その父子兄弟の關係に於て明確を缺くものありと言はねばならない。但これ等が喀 Patin の人と記され

る所からして、Subakhai (蘇巴海、速把亥)の系統のものである事は推測される。然らば他に之を補つて明らかにするものがないかと云ふに、幸に前項と同じく遼夷略の記載がこの要望の一端を充たしてくれるのである。乃ち遼夷略の記載を表示すれば次の如くなる。



前述の所をこの表に對比するに、Bagna baturu 巴噶爾圖爾でこの表の把兔兒にあたること、Ebugedei beile が額伯革打黃台吉に當ること、Sadar が色特爾でこの表の色特兒であること、Sereng が右の色令であること、

Gurbusi は右表の古路不四で色特兒等と從兄弟なること、Ayusi は右表の額木素部の別稱矮要世に當るべきこと、此に昂阿とあるのが前述の和托果爾昂哈即ち Khotoghor Angkha なるべきことは直ちに看取されるであらう。然し前述の Dureng beile がこの表に於ける都令に當ることは字音の上からして疑念はないが、但滿文老檔の記載ではこれを Ayusi, Gurbusi 等の父として居るものある事に關して一考を要すべく、次には葉赫巴圖魯の幼子と記される夔努克 Nangunuk taiji を把鬼兒の末子と見られる昂奴に當てよいか否かに付て一考せねばならない。先づ Dureng beile が果して都令で而も Gurbusi や Ayusi の兄であるか、それとも父であるかは他に傍證のない限り斷定は出來ないが、若し父であるとすれば、この表の卜言願が初め Dureng beile と呼ばれ、其の歿後に長子の額參台吉が Dureng beile の稱號を襲つたので都令と記されたが、明人は十分その間の區別を知らず、滿文の記事もその事情を知悉しなかつたのでかゝる二様の記載がなされたのではないかと考へられる。次に Nangunuk taiji が滿洲實錄の夔努克で、巴林部の葉赫巴圖魯の幼子である事は前掲の記事によつて明らかであるから、若し葉赫巴圖魯がこの表の把鬼兒であるとすれば、把鬼兒の末子である昂奴に擬定されねばならない。但この際疑問となるのは、果して把鬼兒を葉赫巴圖魯にあてよいかといふ事である。それは前に清側の記録の巴噶爾圖爾 Howorth の Bagha batur を把鬼兒に當てたが、bagha は蒙古語で小の義であるに反し、葉赫巴圖魯の葉赫は蒙古語大の義の yekhe の對音とする、意味が全く反對になるからである。恐らく大巴圖魯(大蒙、大雄の義)といふのが正しくて、平常一般には單に巴圖魯(把鬼兒)と云つて居たのを、清人等は蒙古語發音の bahatur を訛つて巴噶爾圖爾と聞いて記したのではあるま

いか。事實に於てこの把鬼兒は速把亥の三子として父が萬曆十一年遼西に於て敗死した後を承けてその叔父の花紗及び一族の花大・伯言兒と結んで大活躍をなした事は、萬曆武功錄東三邊三のト言把鬼兒傳に詳しく記されて居り、終には宗主布延徹辰汗と聯携して萬曆二十二年十月には大學遼西を侵さんとして兵を鎮武堡に入れた時、明の遼東巡撫李化龍、總兵官董一元の爲に邀撃されて敗北し、自らは傷いて後死し、雄將伯言兒は陣に斃ふるに至つた。かくて此に巴林の勢は一時頓挫し、後把鬼兒の兄のト言顯と子の額布格德依(額伯章打黃台吉)とが二派に分れて勢を保持し、やがて間もなく速把亥の弟紗花の手によつて復活されるに至つた。それ程の人であるから小巴圖魯と云ふ事は當らぬ事だ。葉赫巴圖魯が正しい名稱と想定されるのである。尙襄努克が皇太極の爲に射殺された天命十一年の事件は王在晋の三朝遼事實錄卷十六、天啓六年四月寧遠副將左輔報の中にも記され、此には襄路台吉と見えるに反し、一方同日條撫夷副將王牧民據中軍張仲傳報の中には昂奴と記して其の死の事を述べて居り、Nangnuk が昂奴である事は愈々確められる。恐らく昂奴 Ang-nu は Nangnuk の語頭の N が脱落し語尾の K を響かざる轉訛とみるべきであらう。以上述る如く解すれば、前掲の表と清朝側の所傳とは大部分のものが比定されるのであつて、自然の結果として滿文老檔に Barin の Ubasi taiji と見える人はこの表の榜什台吉(語頭の母音の脱落した形)にあて、よいのであり、但老檔に見える Tariki のみはその系統明らかでなく、又 Dureng beile の子とつて Ayusi, Gurbusi と共に Sattar の名を擧げて居るが、この Sattar は色特兒にあたるものか、或は遼夷略には缺けて居る兄弟の一人か何れかでないかと思はれる。

以上述る所によつて、速把亥(蘇巴海)を祖とする巴林部酋の系譜世表は明らかとなつたが、この速把亥は虎喇哈赤の次子として大活躍をなし、嘉靖二十五年には舊遼陽迤北沙之埧間に遷徙して泰寧衛衆を併せ(之が明人に誤つて泰寧酋と記される一因である)明邊にも屢々寇したが、遂に萬曆十一年三月遼東總兵官李成梁と戦つて義州鎮夷堡に敗死した事は萬曆武功錄東三邊三の傳に詳述されて居る。而してその勢力は三子の把鬼兒と弟杪花との繼承する所となつて再び大活動をなしたのである。

六

以上喀爾喀五部の中、明末清初迄残つた正統舊部である札嚕特・巴林の酋首が泰寧衛酋と記されて居るものに就て明側の記録を主として考慮した。その中心となるは巴林の酋速把亥(蘇巴海)兄弟であり、兄の烏巴什(委正)は札嚕特部祖として活躍し、速把亥自身は巴林部祖として兄以上の活躍を演じた。然もその弟には強雄杪花あり、諸子にも亦強豪あり、更にその姪の介囊が一方の中心勢力として清朝に反抗し天命四年七月鐵嶺城外に俘へられた事等は餘りにも有名な話であり、この二者或は明を入れての三者の關係は目まぐるしいものがある。然しそれ等全體の事に及んで述べることは到底この小篇に於ては出来ぬから、それ等は他日の機會に譲ることとし、此ではこれ以上に及ばぬこと、したい。但札嚕特と巴林二部の部酋に就いて考慮した序を以てこの二部が如何なる構成をなして居たか、又清朝と如何なる關係を有して居たかに就いて一言附加へて置かう。

前述する所によつて知られるやうに、札嚕特部は烏巴什(委正)を祖としてその子孫が、又巴林部は速把亥(蘇巴海)を祖としてその子孫が、夫々酋長として構成した鄂托克であつた事は疑ない。然も蒙古遊牧記卷三、札嚕特部の條に「烏巴什子一。長巴顏達爾伊勒登。次都喇勒諾顏。巴顏達爾伊勒登子忠圖、孫內齊相繼稱汗。」とあり、忠圖・內齊の二者の名は遼夷略や萬曆武功錄には見えないが、何か誤記逸脱のあるものとして右の記事を採る時、烏巴什の長子の系統が汗を稱へて全喀爾喀にのぞんだものであることが知られる。巴林部は實際の勢力に於ては宗家ともいふべき札嚕特部を凌ぐものあつたにせよ、汗と稱するには至らなかつた如く、何れも貝勒とか台吉・諾顏を稱して名義上は札嚕特汗に隨從して居たと考へられる。故に札嚕特部に於ては汗を中心にしてその一族の貝勒・台吉等が屬して統制を保ち、巴林部は名義上札嚕特汗の節度に服しつゝ、それ自體一の鄂托克として統制を保つて居たと云へる。遼夷略によれば、烏巴什(委正)に四男ありとし、「蓋委正四男而分二十三派矣。」と云ひ、又夫々の擁兵の數を記し、一方速把亥の系統に關しては、その孫排行に於て二枝分爲十派也と云ひ、曾孫の排行に於て「四派皆卜言顧之種」凡十二派皆把兔兒之種」と云ひ、又「諸夷部約擁騎萬五千而皆受調度於杪花」と記して居る。之は夫々の系統が獨立の状態に在つて横に聯携して、札嚕特汗に服屬して居た事を示すものと思ふ。無論その強盛の點に於ては烏巴什・速巴亥の弟である杪花(卓禮克圖洪巴圖魯)が後に於て甚しく、凡てがその統制を仰いだやうであるが、名目上は札特汗の統制によつたのであると考へる。然る時夫々に於る一種の封建的組織を有して居たと云へるのである。而して夫々が一の鄂托克として團結して居たのは、彼等の基本的經濟生活である遊牧の爲の牧地の共用によるのであつて、遼夷略に札嚕特部に關し

て「直藩陽・鐵嶺六百餘里而牧。市賈仍入開原新安關者紗花第四男委正諸子也」と記し、巴林部に關しては、「其直廣寧・鎮遠・鎮寧・鎮武・西平・海州・東昌・東勝邊四百里而牧・由鎮遠市賞者。速巴亥諸種也。」と記して居るのは、何れも共用の牧地を意味し、又根據地であつた範圍を示すものである。右の記事の中「紗花第四男委正諸子也」といふのは、誤りで、之は紗花が強盛になつてから委正の諸子も事實上支配をうけた事を言つたものと解すべきであるが、それ等が藩陽・鐵嶺の北西に迫つて居り、廣寧より邊牆に沿うて海州・東昌・東勝に及ぶ地區の北には巴林の諸衆が迫つて居た事は、全くこの地區が彼等の占據する所となつたもので、萬曆武功錄速把亥傳に、「嘉靖丙午歲○二十以三衛故。遷徙舊遼陽迤北沙碛之間。」とあるにより舊遼陽（新民府の東北、互流河城、遼瀋塔の地）邊より遼西北邊一帶の地が巴林一族の占據する所となつた事を知るのであり、かくして一族諸派によつて共同の牧地を有し、又以て明との交易を共同になして生活品の獲得をはかつたものと考へるのである。

右に述るやうな喀爾喀の二部が何時頃より清朝と關係を結んだかといふに、萬曆二十二年科爾沁部明安貝勒と共に喀爾喀部老薩貝勒が遣使し、三十三年把岳忠部恩格德爾台吉が來朝した頃から多少の關係はあつたと思はれるが、萬曆四十二年四月札嚕特部鍾嫩貝勒が女を送つて來たのが札嚕特・巴林と清朝の正式關係の始りと言へるのであり、太祖が既に南關哈達・輝發・烏拉を滅して今や將に遼東に迫らんとするに至つた時、この札嚕特・巴林の諸部が關係を結ぶに至つたことは自然の成行であつた。以後續々と關係が出来て太祖の經略は彼等の上になつたのであるが、一方明人は其の事が蒙古の東邊、滿洲に近く起つた事である爲其事情に暗く、又その衛酋を指して泰寧とか福餘と呼んだ

事は、已にその據地が兀良哈三衛の故地に及んで居た以上已むを得ぬ事で、此に記事に混同誤記が生じたのであつた。何れにせよ喀爾喀五部の正統な三部の中、把岳志は最も早く、次に札嚕特・巴林が清朝に通じた事は疑なく、蒙古遊牧記卷三の記載によれば巴林部は太宗天聰二年に色特爾・色布騰父子と滿珠習禮が來歸するによつて清朝に降り、札嚕特も亦同年に内齊・色本が先後一族を率ゐて來歸したのであつて、順治五年新に所部佐領を編成して夫々の旗が設定された次第である。

(昭和十六年七月二十日)

附記 本稿を草するに際し戸田茂喜學士より多大の援助を受けたことを記して同君の厚意を深謝する次第である。